
妄想「漬物列車」

出口 常葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想「漬物列車」

【Zコード】

Z6627E

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

退屈でハラヘリの麻耶は、地下鉄に乗つてぼんやりしているうちに妄想を始める。やがてその妄想がなんだかおかしな方向に進みだす。

(前書き)

リハビリがてら、久し振りに思いついたネタを勢いで文章にしてしました。

うーむ、なんとも言えない。

くだらない話であることは間違いない様で・・・。

朝食を食べている時間が無かつたので、コンビニで野菜ジュースだけ買って、スクランブル交差点を人ごみと一緒に渡る。地下鉄の駅に続く階段を駆け下りて、定期券を改札機に滑り込ませる。エスカレーターでゆっくりと下つていく人ごみを横目に階段を駆け下りると、そこも既に人の海だつた。

上月麻耶は野菜ジュースのストローを口に咥えて飲みながら、人ごみを掻き分けて目当ての車両の止まる位置まで移動する。

並んでいる人の一番後ろに自分も並んで、やつと一息つく。

飲み終わった野菜ジュースのパックを潰して袋に入れながら、麻耶は深々と溜息をついた。これは毎朝のこと。

どうして私はここにいるんだろう。

こんな人ごみだらけの駅に。

ここから更に一時間。人と人の間で潰されそうになりながら、ずっと立つていなければならぬこの苦痛。

最早、拷問器具にしか見えない緑色の車体がホームに滑り込んできた。

ドアが開き、人が吐き出される。吐き出し終わらないうちに人が今度は飲み込まれていく。飲み込まれる流れに乗つて、麻耶も緑色の拷問器具の中に入つた。

「できるだけ、奥にお進みください」

車掌のアナウンス。

「鮓詰め」とよく言つけど、麻耶は何となく違うような気がしていた。寿司の入つた折というのは、整然とそれでいてすつきりと収められていると思う。

こんな雑然と詰め込まれるようなことはきっと無い。そんなことをしてしまつたら、寿司が台無しになるじゃないか。

別のものは無いかと考えていて、樽の中に詰め込まれる沢庵をふ

と思い出した。昨日テレビでやっていた。樽の中に適当に並べられ、詰め込んでいく大根達。

私達もここを出るときには、程よく漬かっているのだわ。

何に漬かっているのかは分からぬけど、何と無くそう思つ。

今日はグレーのスーツを着ているから、私はサトイモね。サトイモの漬物？聞いたことも無い。けど、他に灰色の野菜も思いつかない。隣の人は白っぽいから大根。あっちの深緑はキュウリ。紺色は……紺色の野菜？程よく漬かつたナスビとか。じゃあ一度漬け？ちょっと楽しくなつてきた。

あの赤い女はカブね。

あ、あいつはキュウリというよりはウリね、ウリ。

お、賀茂ナス発見。

うー、京都行きたい。賀茂ナスは漬物より田楽よね。不意に、その賀茂ナスが顔を上げた。目が合う。その顔が、笑つたような気がした。それも、何だか麻耶を馬鹿にしているように。自分の頭の中を覗かれたような気がして、慌てて麻耶は目を逸らした。顔が真っ赤になるのが分かった。なんだか周りが全員麻耶を馬鹿にしているような気がして、とても顔を上げていられなかつた。まだ二十代の癖に、漬物だつて。

ひょつとして、年を誤魔化しているんじゃないのか。家で糠漬けをつけていそうな女第一位だ。

麻耶は地下鉄から飛び降りたい衝動に駆られた。勿論、地下鉄はとつぐの昔に動き出している。大体、爪先を一センチずらすことも保ならないこの状態で、どうやって飛び出すなどできるものか。完全に捕らわれの身だつた。

俯いて、できるだけ目線を上げないようにな。

その視界に、白いストッキングの足が飛び込んできた。

大根足……たくあん……。

あっちは細いな……。

「ほつ……」「ほうの漬物も美味しいよね。

お茶漬けにして……、いやいやそうじゃない。

慌ててその連想を振り払う。何て危ない。

顔を下げているのは危険だから、麻耶は慌てて上を向いた。背の低い麻耶の目の前には、幅広の背中。窓の外も見えやしない。見えたところで、真っ暗な壁が続くだけだけど。

仕方なく上を見上げた。

週刊誌の広告が吊下げられていた。

「有名アイドルA・K合コンでお持ち帰り」

「今、日本が危ない、某大国の罷に気をつけろ」

「今年の夏はこれ!! 新色バッグ、続々登場」

「朝はご飯。朝食を食べる人は成功する

ご飯……。

そう言えば、お腹減ったな。野菜ジュースだけだもの、当たり前よね。

ぐう、と突然お腹が大きな音を立てた。慌ててお腹を抑える。誰かに聞かれなかつた?

周りを見回す。こっちを向いている顔を見つけた。賀茂ナスだ。にやりと笑う。

聞かれた。

恥ずかしさで爆発してしまった。

あんな賀茂ナス、ご飯さえあれば一口なのに。

「あるよ」

誰かが言つた。見ると、左手に御飯茶碗。ほかほかと湯気の立つ白いご飯がこんもりと乗つていて。そして右手にはお箸。いつも家で使つている水色の塗り箸。

無敵だ。漬物相手なら、負けるはずが無い。

「頑張つてね」

応援してくれているのは右手のお箸だった。長年一緒にいるから、ついに心が通つたのね。嬉しくて、麻耶は顔が熱くなってきた。

お箸を持った右手を伸ばす。嫌らしい笑みの張り付いた顔を思い

切り挟んで、そのまま引っこ抜く。

すぽんと音を立てて賀茂ナスが抜けた。

「ふふん、やまあみなさい」

「それはどうかな?」

賀茂ナスの笑い顔はちつとも治まつていなかつた。ニヤニヤしながら麻耶を見ている。

引っこ抜いたのに。

「周りを見てごらん」

賀茂ナスはそう言つた。氣付くと、回りは賀茂ナスだらけだつた。大根も、キュウリも、カブもごぼうも、全部賀茂ナスに変わつていて、麻耶をニヤニヤと笑いながら見つめていた。

「まだ二十代なのに」

「漬物だつて」

「糠床をもつてそつ」

「年を誤魔化しているんじゃない?」

「第一位だ」

「漬物だつて」

「おかしいね」

「第一位だ」

「糠床」

「バカみたい」

「バーカ」

「バーカ」

大合唱が始まつた。麻耶は茶碗も箸も放り出して、思わず耳を抑えた。

「やめてやめて」

世界がぐるぐる回りだした。

バカの渦に巻き込まれて、何だか世界は真つ暗になつた。

「麻耶……麻耶」

麻耶の体が揺すぶられた。目を開けると、目の前には見慣れた同僚の顔。覗き込まれていた。

「あれ？」

「あ、気がついた」

呆れたような同僚の顔。

「ここは？」

「駅の仮眠室よ。貸して貰ってるの」

同僚はそう言つて、それから小さく溜息をついた。

「ほら、起きれる？」

言われて、麻耶は自分が横たわつてることに気がついた。起き上がろうとして、ちょっとと体がふりひく。

「全く、また朝御飯抜いたのね」

「うん、時間が無かつたから」

「そんな事するから、電車の中で倒れたりするのよ。しおりゅうじやない。いい加減学びなさいよ」

「でも……賀茂ナスが……」

麻耶の発言に同僚は眉をひそめた。

「何言つてるの？大丈夫？」

真顔で尋ねられると、ちょっと自信が無い。

「賀茂ナス？食べたいの？じゃあ、今度の休みに京都でも行く？」

「ううん……いい」

賀茂ナスを思い出すと、どうしてもあの嫌らしい笑顔が目に浮かぶ。あんな悪夢のような光景は、もう「ごめんだつた」と、その時、ドアがノックされた。

「はい？」

麻耶の代わりに同僚が返事をした。

「あの、大丈夫でしたか？」

男の声だった。

「ああ、はい、もう大丈夫です」

「失礼しても良いですか？」

「ええ、どうぞ」

同僚はそう言つてから、すかさず麻耶のほうを向き直つた。

「あんたが倒れたのを見つけてくれて、運んでくれた人よ。ちゃん
とお礼言いなさいよ」

「う……うそ」

そう言いつつ、麻耶は嫌な予感が拭い切れない。

ゆつくりとノブが回り、そしてドアが内側へと開いていく。

「失礼します」

ドア越しで無いその声は、麻耶に確信を抱かせる。

この声に聞き覚えがある。

そして、声の主が顔を覗かせた。

「賀茂ナス！」

何てこと、こんなところまで。

賀茂ナスと目線が合う。

にやりと、賀茂ナスが笑つたような気がして、麻耶の意識は再び
ゆつくりと遠のいて行つたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6627e/>

妄想「漬物列車」

2010年11月6日01時33分発行